

## カンパラ通信～ナカセロの丘から

### 第5回 「ミスター・ネリカ」とウガンダにおける米作り

今年も年が押し詰まってまいりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。今月号のカンパラ通信に何を書こうか少し迷いましたが、今月はお米の話題で行こうと思いました。

皆さんグーグルで「ミスター・ネリカ」と検索してみてください。すると約4万4千件ありと出て、坪井達史専門家のことが紹介されます。坪井達史こそが「ミスター・ネリカ」その人なのです。2004年、米の作付け振興のため坪井専門家がウガンダにやって来たと聞いています。ネリカ（NERICA）とはお米の種類で「New Rice in Africa」の頭文字をとってNERICAと呼ばれています。このネリカ米は、西アフリカ稲開発協会の手によりアフリカ原産の生命力の強いアフリカ稲とたくさん実のなるアジア稲をかけ合わせて1994年に誕生したと言われていています。ウガンダで米の普及と言えば「ミスター・ネリカ＝坪井さん」というのはもう定番中の定番です。その坪井さんがウガンダを離れたのは2014年秋です。10年間にわたり、坪井さんはウガンダではもちろんのこと、周辺国も加えた東アフリカの国々でのネリカ米の普及に多大な成果を上げられました。そして今でも短期専門家として年に数回ウガンダにいらしておられるとのこと。



圃場の坪井専門家

ウガンダで主食というと地方によって異なります。首都カンパラを中心とする中央地域から南西部にかけては、マトケという熟しても緑色のままの甘くないバナナです。東部はトウモロコシの粉を原料とするポシヨと呼ばれるもの、北部の方はミレットという穀類の一種のシコクビエです。その他に、キャッサバ、ジャガイモ、サツマイモといったイモ類も

よく出てきます。主食とまでは行きませんが米料理も見かけます。なかでも、お祝いの時のbuffet・スタイルの食事の時には普通に白いご飯は提供されます。インド系の人々が昔からウガンダに入ってきていましたから、そういう状況もウガンダでお米を食べるのが普通になっている要因なのかと思ったりしています。

年間を通じて温暖なウガンダは米作に適していると言えます。日本では米作りといえば水稲しか思い浮かべないでしょうが、ここウガンダでは陸稲が主流でネリカ米も陸稲栽培です。かといって水田がないわけではありません。ケニア寄りのウガンダ東部へ行けば車窓に広い水田地域が目に入ってきます。この水田は1960年代に中国の援助で開墾されたものです。しかし、時間が経っているのだから近くに行くとあまり整備されていないのに気付くのだそうです。

さて、ウガンダでの稲作促進の本拠地は、カンパラから北北東に向かって小一時間自動車で行ったナムロンゲというところにある国家穀物資源研究所 (National Crops Resources Research Institute) です。「ミスター・ネリカ」たる坪井専門家がウガンダにやってきて開始したネリカ米の普及にはウガンダ政府も当初から強い関心を見せ、当時のブケニヤ副大統領が先頭に立ち普及活動を応援してくれました。また、2005年まで駐日ウガンダ大使だったババ国会議員 (元副大統領府国務大臣、前治安担当国務大臣) もネリカ米の普及に多大な協力をしてくれた一人です。



稲研究・研修センターの玄関で  
吉野専門家と筆者



圃場で NaCRRRI 所長と筆者

私が前回ウガンダで勤務していた2006年から08年には同研究所の建物の一角を借りて事務所とし、坪井専門家をはじめ日本人がその敷地にいろいろな種類のネリカ米を育てながら育種・栽培研究をしておられました。今は、同研究所の敷地内に日本政府の無償資金協力援助で建てられた独立家屋の稲研究・研修センターが作られ、また、少し離れたと

ころに陸稲や水稲を植えている広い圃場があります。そこでは日本から来た専門家が海外青年協力隊の支援や現地の職員の協力の下にネリカ米の研究・普及活動を行っています。

これらの熱心なネリカ米の研究・普及活動の結果、この10年間でウガンダでの米の栽培面積は13万ヘクタールとほぼ1.5倍に、そして生産量は2倍以上の25万トン(精米ベース)へ増加と、順調な成果を上げてきました。

ネリカ米の研究・普及は今も引き続き我が国の対ウガンダ支援の大きな柱の一つです。今回私が再びウガンダに参りまして、既にこの分野のプロジェクトに関わる人々、例えば東部灌漑水田事業の開発調査チームの訪問を受けました。また、この10月に私もナムロンゲの稲研究・研修センターを訪問し、吉野稔専門家の案内で現在進行中の我が国のネリカ米普及活動を勉強させていただきました。様々な米普及活動の中でも、ウガンダに逃げて来た難民に対する米栽培の研修活動は最近ウガンダ国内や当国の国際機関の間で評価が高く、私もしばしば日本の貢献としていろいろな場所で宣伝させていただいています。本年7月上旬に南スーダンで騒擾事件が発生してから現在に至るも多くの難民がウガンダに押し寄せてきております。ウガンダでは、これら南スーダン難民を人道的に受け入れています。難民の人たちは長期的にウガンダに滞在しなければならないことは今や明らかです。長期滞的な難民生活において独り立ちを少しでも促すために、単にテントや食料と水を配給するだけでなく、食生活を自立できるよう耕作のための土地を政府は難民の皆さんに与えています。日本政府はそのように耕作地を入手した難民の人たちに対してネリカ米を育てる技術を伝えるための普及・研修活動をUNHCRと協力して行っているのです。このように難民が「手に職を付ける」援助をすることは国際的に望まれていることなのです。それをまさにここウガンダで日本が実行していることに私は誇りを感じます。



少年時代の坪井専門家

最後に、私の坪井専門家とのつながりですが、特別なことはありません。2006年1月から3年近く在ウガンダ日本大使館の次席館員をしていた関係でよくナムロンゲの研究所には日本からのお客様をご案内するため同行し、現場で一緒に坪井専門家のネリカ米の研究・普及活動のお話を聞きました。また、坪井専門家の発案で在留日本人の子供たちを対象に芋掘りと田植えの経験をする行事に当時小学5年生の息子と一緒に参加したものです。その度に、ネリカ米の研究と普及にかける坪井専門家の熱い情熱をいつも感じていました。そして思い出すのは、坪井専門家が自分の少年時代に田植えをしている写真をパワーポイント資料の最後のページに載せていたことです。稲作一本の人生というのが滲み出ているのが何とも言えませんでした。もうひとつ、ネリカ米の理解と普及の貢献にあわせてネリカ検定という独自の制度を編み出して、表彰状を出していたのも面白いアイデアだと思いました。

因みに私の家内は、自宅のバケツにネリカ米のモミを植え、稲刈りができる状態まで育てたお米の収穫量が検定を通過し見事にネリカ2級をいただきました。私の方は、上記のような大使館の業務としての関わりから、確か準1級くらいだったような気がします（もし、高めの級に記憶間違えしてありましたらお許しください...）。

近いうちに「ミスター・ネリカ」と再会できる日が来ることを今から心待ちにしているところです。

（以上）